

鞭の下の歌

ちちよ ちちよ

いかなればかくも激しく 狂ほしく

はた切なく われのみを打ちたまふや

飛び来る鞭のきびしきに耐え兼ね

暗き水面の只中を泳ぎ悶轉^{まろ}べど

石塊^{いしくれ}の重き袖は沈み 裳裾は蛇の如く足に絡みて

はや濁水はわれを呑まんとす

おお わがちちよ

なにとて おん身 われを殺さむとするぞ

死にたくはなし！ 死にたくはなし！

卑しく 空しく いはれなき汚辱の下に死にたくはなし！

好みてかくも醜く 病みさらばへるにあらざるを

おん身の打ち振ふ 鞭は鳴り

鞭はとどろき

ああ 遂に―

鼻はちぎれ 額は裂けて血を噴けり

おおされどわれ死なじ 断じて死なじ！

たとへ鞭の手あらくなりまさり 濁水力を殺げど

おん身の心やはらぎ 憐情に飢ゆる時まで

おおその時までは 血を吐き 悶絶すとも

おん身の足下に われ泳がん 泳ぎて行かん。

(昭和十二年「山桜」六月号)